



今月のことば 令和8年(2026) 8月 <No.240>

人生の伴走者



@芸術新聞社

福岡県太宰府市に、道下美里さんというブラインドマラソンのランナーがおられます。視覚に障害を持ちながら走り続け、2020・東京パラリンピックの女子マラソンでは、金メダルを獲得されました。

道下さんの隣には、常に「伴走者」がいます。二人は短いロープを持ち、伴走者は曲がり角や路面の状態、周囲の選手の動きなどを声で伝えます。

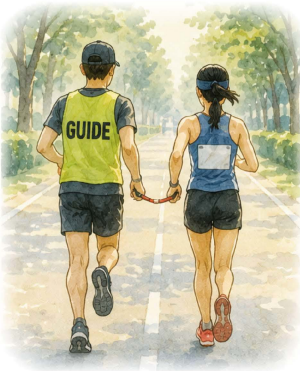
「半歩、上げよう！」樋口さんの声が私の耳に響きます。いっしょに流した汗と涙。ロープを通して二人で紡いできた熱い思いが伝わってきました・・・

「これ以上落としたらダメだ。ピッチをあげて!」「三〇メートル。一〇メートル。いけるぞ!」必死に樋口さんは叫び続けました。

『いっしょに走ろう』 道下美里 著より

これは2014年防府読売マラソン、道下さんが非公認ながら世界記録を1秒上回ったレースでのシーンです。

どれほど深く信頼していても、伴走者は道下さんの代わりに走ることはできません。道下さんが苦しくなったときに背負うことも、ロープを引いてあげることもできません。けれども、道下さんは一人で走っているではありません。方向を知らせ、苦しいときには声を掛けながら、すぐ隣を走り続ける人がいます。



私たちは、ときどき仏様に願います。「この苦しみを取り除いてほしい」「私の望む方向へ、人生を動かしてほしい」…。

しかし阿弥陀如来は、私の思いどおりに人生を動かしてくれる仏様ではありません。私の代わりに生き、決断してくれるのでもありません。人生は、私自身の足で歩かなければなりません。

しかし私は、一人で歩いているのでもありません。迷い・立ち止まり・道を間違える私に、「あなたを決して見捨てない。必ず救う」と、阿弥陀如来は「南無阿弥陀仏」のお念仏となって、絶えず声をかけ続けてくださっています。

「決してロープを離さず、声をかけ続ける」ー。お念仏（南無阿弥陀仏）のはたらきは、私たちに安心を与えてくれる「伴走者」のようなものではないでしょうか？

まだ人生のゴールに着いたわけではない、これから何が起こるのかも分らない…。それでも私たちは、その歩みの出来不出来にかかわらず、如来の声に導かれながら必ずゴールにたどり着くことができるのです。



慧日山 真光寺